

## 言葉の意味と力を失わせた

2020年09月16日

『週刊金曜日』の9月11号の「言葉の広場」に、下記の私の投書が掲載された。

《安倍晋三首相は任期を前に辞任することになった。難病の潰瘍性大腸炎の持病が悪化し辞任することになり、国民の力(野党を含む)で辞任に追い込めなことが残念である。

安倍政権を少し振り返ってみたい。憲法改正は、安倍首相の悲願であったようだが、国民は戦争の痛手を記憶し、常に半数以上人々が憲法擁護の声を上げてきた。平和憲法が戦後の平和を維持してきたし、平和憲法は人類の希望である。憲法は国の在り方と国民の尊厳を守る基本法なので、一部の人の扇動で動かしてならない。

安倍首相は、株価の上昇と雇用の拡大をもたらしたアベノミクスをこれまで自賛していた。株価は、日銀による天井知らずの緩和政策と国民の年金で株を買って上昇したのではないか。株の所有者は利益を得たであろう。大企業は株主の顔ばかり見ている、国民のためにある企業とは認識していない。社内留保より、労働者の賃金を上げることが先決ではないか。雇用も増えたというが、企業はいつでも解雇できる非正規労働者をつくり出しているのだ。生活が豊かになった実感はなく、貧富の格差を生み出した。今回のコロナ禍で、弱い立場にある人々は困窮にあえいでいる。日本人は勤勉である。勤勉に働いても、自分の家庭が持てないようでは、政治不在と言わなければならない。

安倍首相の政治姿勢に関し、二つの疑義を持っている。一つは、同じ考えの人を厚遇するが、違う人には排他的な態度を取ることである。森友・加計学園問題、桜を見る会問題は、「友だち優先」のためには権力も行使したということだ。二つ目は、言葉の意味と力を喪失させたことである。人間は言葉を用い、交流し、信頼関係を築いていく。安倍首相は、耳ざわりのよいキャッチフレーズを次々に打ち出し、記者会見では、美辞麗句を並べるが、その内実は真逆に動いてきた。オリンピック・パラリンピックを招致するために、原発事故を「アンダーコントロール」と言ったのには驚愕した。核廃絶を口先では言うが、実現のために、何の手だてもしていないどころか、後ろ向きである。閣僚たちの引責辞任に際し、指名した自分に責任があると言いながら、何の責任も取っていない。言葉に不信感を持つと、国民の間に深い虚無感が増幅し、政治不信が醸成されていく。若者が投票に行かないのは政治的危機である。良い指導者を持たない国民は不幸である。そして、良い指導者を持つかどうかは国民に責任があることを、しっかり自覚したい。》

安倍首相の後継者に、菅義偉官房長官が圧倒的多数で選ばれた。コロナ禍の緊急事態という理由で、党员・党友の投票を省略し、国会議員と各都道府県代表者の投票による選挙であった。立候補者たちの政策論争を聞く前に、各派閥が雪崩を打って、菅長官に票が積み上げられ、結果は決まっていた。論功行賞によって、良いポストを得ようとする画策であろう。派閥の領袖たちによる派閥政治は旧態依然と生きており、閉鎖的な自民党政治は変わらない。岸田文雄政調会長は「分断から協調へ」、石破茂元幹事長は「納得と共感」をキャッチフレーズにしていたが、分断を超え、納得できる政権を期待することはできない。安倍政権を踏襲する菅政権では、自死者を出した「森友問題」の改竄の真相を明らかにすることはない。隠蔽や虚偽ではなく、事実を踏まえた上での政策が国民の信頼を得ていく。自由と民主主義を標榜する政治家たちが、自らの手で壊しているようだ。安倍首相の病氣への同情、菅長官は集団就職からたたき上げて来たからか、安倍政権の支持率は異様に高い。政治に希望が持てないと、国民生活は困窮と混乱に直結していく。